

観 音



本四国霊場巡拝

一番札所 霊山寺にて

平成6年8月

第21号
年2回発行

発集発行

広島県安芸郡府中町
茂陰2丁目2-8-10

真言宗 正観寺
小出真行

自分のものでありながら

その実体を知りがたいのは、

我が心である

(十住心論より)

「清らかな水に

なるには」

平成六年度版環境白書によりますと、

「みそ汁一杯を川に捨てて、魚がすめるようにきれいに戻すには、おわん何杯の水で薄めればいい？」

皆さん、おわかりですか……。

答えは、なんと七千杯とのことです。

何の気なしに流しています、生活排水ですと、

……。悲しいことです。

住みやすい地球を守ることをもう一度考えさせられますね。

利町、田野町を経て、18分安田町in、安田タクシーに乗り換え27番神峰寺へ。11時10分昼食（安田町ドライブイン27）。33分発。45分安芸川橋、49分岩崎彌太郎旧家わかれ、53分野中兼山の防風林6km続く、58分芸西村in、12時01分右に土佐ロイヤルホテル、歩き遍路を追い越す。夜須町を経て、09分赤岡町in、18分28番大日寺、44分野市町in、50分物部川、龍河洞わかれ、57分南国市わかれ、米二期作の地。13時05分29番国分寺、霊場会本部あり。記念撮影。09分発。19分30番善楽寺、50分31番竹林寺、ゴザイマス、調の添乗員の説明。ここでまた松寿会と同道。別れを告げる。いざりつつ草引く女あり、お参りできてありがたし。58分2級河川熊野川。14時07分榑福屋観光高知店で買物、39分発。浦戸湾、坊さんと簪の話。15時30分32番禅師峰寺、16時35分33番雪隠寺で打ち止め。45分高知市民宿英光到着（泊）2階18畳、鯉の皿鉢2回目。

第4日 5月28日（土）晴

※松寿会は途中ピワの夫を買い、おくれたが、高知市高砂旅館泊、一旦帰神、以後中期、後期と3回にわけて順拝するといふ。
4時30分起床、小便後、トイレの外に出られず、戸の鍵のあかないのに困っていたら、山本姉の協力により、やっと外に出ることができた。7時19分出発。29分土佐市、春野町わかれ、37分34番種間寺、記念撮影。このお寺のトイレは変わっていた。入口に、銭湯の紺色の暖簾が2枚垂れていて、ゆくと書かれていた。また、帖紙禁止としてあるが、そのかわりに掲示板が設置してある。57分発。8時07分灌漑用水路の整備されたアジサイ街道。10分仁淀川、47分36番青龍寺、鶯は啼き、雉は飛び、ベッコウトンボ（土佐市指定保護虫）は舞い、少年時代にかえった気持ち。9時19分発。21分宇佐大橋、宇佐の渡しの話。40分高岡町in、44分高岡タクシーに乗り換え、55分36番清滝寺、記念撮影。10時23分発。26分昼食。「たべていただけますか」と添乗員（ドライブイン蓮池食堂）※スカイプラザ・よこなみを変更。アサリ汁、鯉の皿鉢（これで3回目）他。11時06分

発。これより80分で岩本寺へ、途中窪川で休憩予定の由。25分須崎市in（人口4万人、高知県第一の漁港）出光ガソリンスタンドで給油、33分発。39分仁井田川、中土佐町までトンネル、坂多し。51分中土佐町in、52分久礼坂、12時09分窪川町四万十川物産観光で買物。今までのトイレで超一流。手漉和紙製の葉書を買ひ損ねた。28分発。38分37番岩本寺、天井の壁画がすばらしい。58分発。13時14分荷稻駅（土讃線）、17分バイク7台に追い抜かれる。19分土佐伊与書浜、土佐くろしお鉄道敷設予定地。21分佐賀駅。幡多路、土佐七浜は景勝地。27分白浜海岸、35分大方町の長い砂浜入野松原。39分土佐入野駅、42分西大方駅、45分中村市in。52分四万十川、日本最後の清流一七七km、中村市は土佐の小京都といわれ、人口5万。14時07分蘭草田続く。14時14分39番



延光寺。本堂。高知県宿毛市平田町中山390。境内の池にすんでいた赤亀が竜宮から鏡を背負ってきたと伝えられ、国の重要文化財になっている。納経朱印も亀である。本尊・薬師如来。39分発蘭草田、桑畑続く。15時01分足摺わかれ、28分34分美しい海岸、砂浜、タバコ畑。37分以布利港。44分土佐清水港。48分スカイライン料

※住職とは前期最後の夕。第5日 5月29日（日）晴

4時40分住職ら有志数名、一般観光客ら数十名と展望台でご来光を迎える。福岡からの青年数名、早くも待ち構える。5時35分内陣で朝の勤行。副住職長崎勝教師の法話、バス遍路もバスの中で、先祖の菩提を弔ら祈るべしと。6時53分発。7時03分足摺スカイライン。14分料金所。19分土佐清水港。25分高知市。38分龍串。44分貝ノ川漁港。51分高さ80mの断崖見ゆ。8時08分宿毛市in、車中の人よく眠る。宿毛市は人口4万人。五〇〇年前一条冬、開港。高知県最西端の市。元首相吉田茂誕生地。27分愛媛県一本松町in。40分城辺町in。43分御庄町in。46分40番観自在寺。平城天皇の勅願所だけあって、すばらしいお寺だ。薬子の変を思い出す。一昨年秋季い法話をされ、楽しみにしていた住職三好龍諦師は折悪く外出中のため、会われなかったのは残念。近くの平城小学校もS38改築、豪華な構えだ。9時16分発。32分内海村。34分津島町。獅子文六の「てんやわんや」の取材地。真珠養殖地。45分津島大橋。56分宇和島市in。人口7万5千人、闘牛の町。伊達氏の城下町。10時04分宇和島港。28分三間町。34分41番龍光寺。ゆるやかな石段一〇〇。11時02分42番佛木寺は道からすぐ。ここには、下村末信一〇万円、上野俊男二五万円（いずれも府中町砂本講）の寄附碑がある。20分発。22分吉田湾。36分43番明石寺、めずらしい賽銭箱。記念撮影。12時06分発。14分昼食。宇和町字パーク1階（和）。うどんの準備おそし。50分発。55分三瓶わかれ。やがて大洲市へ。大洲市は加藤氏の城下町、脇川鶴飼学問（中江藤樹）の町。13時13分住職別れの挨拶（あす30日（月）のつぎきならぬ法事のため、今夕大洲から松山へ出、今夜中に府中町へ帰らなければならぬ。あと一日を残し、甚だ心外であるが、来春緩期の再会を約したい。また今夏の石鎚山順拝にもお会いしよう）。18分丁大洲駅住職下車。26分番外十夜ヶ橋、橋上では杖をついてはならない。45分発。54分五十崎駅。57分内子駅。凧あげ大会の町。

14時05分立川駅。13分中山郵便局。18分双海町in。23分伊予市in。25分向井原駅。57分砥部郵便局。15時03分三坂峠(日七〇〇m)。25分44番大宝寺。大杉林の登り口に、朝まいは、わたしひとりの銀杏散りしく(山頭火)16時07分発。25分美川村in。26分45番岩屋寺。一昨年秋の登山道の面影なく、すっかり舗装されている。ヒキガエルと蛇、大ミミズの死闘再現不能。しかし、17時寺の下で、昼食ぬきの歩き遍路山口先達、別府市)と平塩姉との劇的な再会場面あり。37分発。58分おこまじゅう店。18時09分発。35分砥部中学校前。43分松山市in。50分松山市浄瑠璃町1-1-8、浄瑠璃寺門前長珍屋到着(泊)。20時15分より立石庵で有志数名カラオケ。

※第6日目は、紙面の都合で次回とさせて戴きます。

四国遍路と先祖供養

木村 弘全



私事ですが、十二年前岡山の菩提寺の住職との話から始めます(十五年前、寺の住職も別の方と交替しています)。

「昔、馬の蔵に家財を積み岡山市内で遊興に明け暮れ、家も潰れてどこぞへ行ったきり味野の本家も途絶えている家が有るそうです。」「実は私の祖父なのです。原爆で亡くなりました。」「そうですか。」「味野の本家も絶えているとか……。」

昭和二十年三月、彼岸に母と二人で現在JR瀬戸大橋線近くの味野の本家へ墓参、約十軒

の徒歩で峠越えして帰る途中、由迦山蓮台寺から四国が見えた時に「ヘンロがしたかった。」とつぶやきました。その言葉はせつなく哀れを感じさせられ、そんな母の心の内も読み取れず、数年前にやっと気付き、私の八十八ヶ所巡りが始まったと思います。どれ程辛い苦しい生涯を過ごしたことか。それでも昭和十三年には祖父の墓は建立しています。祖父が飲み潰した話はしていましたが、愚痴をこぼしたことは私の記憶にはありません。あと数年で五十回忌を迎えます。そんな母が力を貸してくれているからこそ、お寺の手伝いもさせて頂いていると思っています。今回祖父の五十回忌、父の十三回忌の法要も出来ました。金剛福寺の住職の話に「四国路には全国の死者の魂が集って居られます。きっと何処かでお会い出来ますよ。」私はお遍路と先祖供養はどこかで結びついているのではと思えます。本年度から過去帳を手にして霊場巡りさせて頂いています。同行二人の遍路はお大師さまだけではない。御先祖様への感謝の心がなければ御縁に会えないように思えます。五月の巡拝では、岩屋寺で老大先達と手を取り合ってお話をされていた姿は、まるでお大師に出会った様な感動に胸を躍らせたのが有りました。おかげを受けさせてもらったと多くの人から聞くにつけ、ほんとうにわれながら嬉んでいます。

おかげ様の人生を歩ける幸せ、ひとえに先祖供養の心が有ればこそだと思えます。来年は高野山へ行きますよう。

南無大師遍照金剛

弘金

編集後記

久し振りにお参りをさせて頂きました。四国八十八カ所遍路は、開祖、弘法大師・空海を慕って、その修行の跡を辿る旅なのです。大師は四国讃岐に生まれ、若き修行僧時代に四国の霊山霊場を巡って苦行を修めました。

この四国遍路には、大師の足跡を偲ぶという意味のほかに、再生という意味も込められています。すなわち四国(死国に通ずる)の地で一度死んで、再び現実世界に甦るともいえるのです。

今回の通信には、山岡様、木村様に原稿をお願い致しましたところ、快よくお書き下さいまして有難うございました。尚、川岡様の原稿は次回も連載させて頂きます。

